

【一】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

保健室に駆け込むと、部屋にはおとなのひとが二人いた。おじさんとお婆さん。椅子に座って、ヒデお婆と話していた。

びっくりしてわたしを振り向く二人の間から、たっちゃん顔を出した。

「あれえ？ カワムラさん、かえったんじゃないの？」

たっちゃんは思いがけずわたしが戻ってきてうれしそうだったけど、おじさんとお婆さんは——それからヒデお婆も、ちよつと困った顔でわたしを見ていた。

ヒデお婆は「まあ、ちよつとよかったかもね」と言っ、わたしを手招いた。

「ちよつとね、河村さん、たっちゃんとベッドで遊んであげて。一人だと退屈しちゃって、すぐ外に出てきちゃうから」

ドロップスを二つもらった。オレンジとハッカ。二つとも、めずらしく最初から出して机の上のティッシュに載せてあった。

はい、とオレンジを渡そうとしたら、たっちゃんは「ぼく、そっちにする」とハッカのほうを指差した。

①「ハッカでいいの？ 『はずれ』だよ」

「うん、へいき」

たっちゃんはわたしの手のひらからハッカのドロップスをつまんで、おじさんとお婆さんに「みて、みて」と言った。「パパみて、ママみて、ハッカなめちゃうよ、ぼくできるんだよ」——両親だったんだ、この二人。

たっちゃんはブドウを食べるときみたいに顎を上げ、くちびるをとがらせて、ぱくつとドロップスを口に入れた。

顔がしよぼしよぼとしぼむ。でも、吐き出さずにがまんした。「すごい、たっちゃん」とお母さんが拍手をした。その顔をちらっと見て、気づいた。お母さんの目には涙が浮かんでいた。

② わたしたちがベッドに入ると、ヒデお婆はふだんは使わないカーテンを端から端までぴつたりと閉めた。

外が見えない。でも、たっちゃんはそれが逆に気に入ったのか「ひみつきちみたい」と笑って、ベッドに座ったまま掛け布団を頭からすっぽりかぶって、あかざきんちゃんみたいに顔だけ出した。

「あのね、ぼくね、しゅじゅつするの」

いきなり——。

「あしたからにゅういんするの、お婆あちゃんちのちかくのだいぐびよういんに」
笑いながら——。

「それでね、えーとね、インナイガツキューっていうのがあるの、そこ。びよういんのなかのがっこうなの。しゅじゅつ、なんでもしれないといけないから、ぼく、そこにてんこうするの」

コリコリッ、とドロップスと歯が当たる音が聞こえた。ハッカ、おいしくない、と息を齒ですうすう鳴らしながら、笑った。

両親と先生の話し声は低くて聞き取れない。ただ、お父さんもお母さんもヒデお婆にお礼を何度も言っているような気配だった。

もつと耳をすまして話を少しでも聞こうと思っていたら、廊下からばたばたと誰かが走ってくる音が聞こえた。

「すみません、河村さん来てませんか？」——予想どおりのひとだった。はあはあ、ぜえぜえ、と息を切らして、学校中走りまわっていたのだろう。

わたしはオレンジのドロップスを舌と上顎の間に押しつけて、たっちゃんにも、静かにね、と口の前で人差し指を立てて見せた。

「来てないよ」

ヒデお婆は、そっけなく言った。

「そうですか……」と、細川先生の声は半べそをかいているみたいに震えた。

「でも、職員室で待ってれば来るわよ。待ってなさい」

「え、でも……」

「見てわかるでしょ、お客さんと話してるの。邪魔しないで、職員室で待ってなさい」

「来るって、なんでわかるんですか」

「あんたよりたくさん見てるからだよ、子どもを」

「そんな……わたしだって……」

「おなか痛くて泣いてる子ども、何人見てる、あんた」

怖い声だった。

「膝をすりむいて泣いてる子ども、何人見てる」

もつと怖くなった。

「子どもはにこにこ笑ってるだけじゃないんだ」

「すぐ怖い——けど、その声は、おじいちゃんとお婆あちゃんとお父さんとお母さんをぜ

んぶ合わせたみたいなの、頼もしい声でもあった。

細川先生がなにも言い返せずに立ち去ったあと、ヒデおばはたっちゃんの両親ともう少し話をしてから、カーテンを開けた。

「たっちゃん、そろそろ帰るって、お父さんとお母さん」

「ぼくも？」

「あたりまえでしょ」

横からお父さんが「たっちゃん、ヒデコ先生にお別れしなさい」と言った。「いままでお世話になりました、って」

お母さんは黙って、ハンカチを目元にあてていた。

たっちゃんはお別れの意味がよくわからないのか、きよんとしてうなずき、「ヒデコせんせい、またね」と手を振るだけだった。こっちのほうが悲しくなって、たっちゃんの手術のことが心配にもなって、胸が熱くなった。口の中でドロップスが溶ける。³悲し涙が溶けて、広がって、染みていく。

ヒデおばは、白衣のポケットに手を入れた。

「たっちゃん、もうハツカのドロップス食べた？」

「うん、おいしくないからのんじやった」

「じゃあ、お別れだから、もう一個あげる」

緑の缶をポケットから取り出して、カラカラ、と音をたてて振った。

「たっちゃんがいちばん欲しいドロップス、言いなさい。それが出たら、手術が成功して元気に遊べるよ」

うそ――。

だめ、それ――。

「ぼく、ブドウがいいなあ」

ほら、やっぱり。

わたしはあわてて口の中のドロップスを呑み込んで、ヒデおばに、だめです、やめてください、と言おうとした。でも、オレンジの甘みで口の中がべたべたして、呑み込んだドロップスも喉にひっかかったみたいで、声が出ない。

「なにが出てくるかわかんないけど、ブドウだったら、うれしい？」

「うんっ」

「先生もうれしいけどねえ、どうだろうねえ、うまくいくかどうかかんないよ」

そんなのやめて。ゲームにしないで。絶対に負けるゲーム、たっちゃんにやらせないで。

ヒデおばは蓋を開けた缶をまた軽く振って、たっちゃんの手のひらに、ころん、とドロップスを落とした。

紫色のドロップス――「やったーっ」とたっちゃんは歓声をあげた。

ブドウ。間違いない。あの色、あの形は、ブドウのドロップスだった。赤い缶のやつにか入っていないブドウが、緑の缶から出てきた。

お父さんとお母さんも手を取り合って大よろこびだった。やったな、やったね、すごいな、よかったね、と二人とも涙声でよろこんでいた。

たっちゃんは、あーん、と口を大きく開けて、ブドウのドロップスを舌の先に載せた。口を閉じて、ぺろん、ぺろん、となめて、「おいしいっ」と笑った。

きつと、その味、うれし涙だ。そして――何週間か、何ヵ月か、何年先かわからないけど、たっちゃんのお父さんとお母さんはもう一度、二人で手を取り合ってうれし涙を流すんだろ⁴うな、と思った。信じてる。⁵不思議な奇跡が起きたのだから、それ、信じていい、と思う。

たっちゃんが両親と一緒に帰ったあと、ヒデおばは「あんたも食べる？」とドロップスの缶を差し出した。

「あの……」やっぱり、不思議だった。「なんでブドウが出たんですか？」

「なんでって、入ってたから出たんでしょ」

そんなことじゃなくて。わたしはドロップスの緑の缶と赤い缶の違いを説明して、緑の缶からブドウが出ることはありえないことを伝えた。

でも、ヒデおばは驚いた様子もなく、「あんたのもブドウだよ」と言った。

「わかるんですか？」

「出してごらん」

缶を受け取って、手のひらに出した。一個だけのつもりだったけど、勢いがつきすぎて三個いっぺんに――ぜんぶ、ブドウだった。

びっくりして、残りのドロップスも手のひらに出した。

ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ、ブドウ……。ぼうぜんとしている隙に、ヒデおばは机のひきだしを開けて、赤い缶のドロップスを取り出した。

「たっちゃんがブドウが好きだっていうの、聞いてたから」

そっけなく言って、中身がぎっしり詰まった赤い缶を振りながら、「面倒だよねえ」としかめつっらになる。

「そこから出して……入れたんですか、こっちに」

最初から机の上に出ていたオレンジとハツカのドロップスは、赤い缶に入りきらなかったぶんだったのだろう。

「ちよつと、こんなにいっぺんに出しちゃうと、しけっちゃうじゃない」

叱しかられた。「食べるぶんだけ食べて、あとは中に戻かえなさい」とにらまれた。でも、わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて、「ああ、もう面倒だった面倒だった」と大げさにため息をつく。

わたしはブドウを一個だけ口に入れ、あとはぜんぶ緑の缶に戻した。

ぺろん、ぺろん、と舌ではじくようにドロップスをなめていると、ブドウの味や香かりと一緒に、自然と笑い声も出てきた。甘いなあ、ドロップス。おいしいなあ、すごく。

ヒデおばはそっぽを向いたまま「どうするの」と言った。「細川先生探しに来たの、聞こえたでしょ」

「はい……」

「職員室で待ってる、って。伝言、伝えたからね、あとはあんたが決めなさい」

違うじゃん、職員室で待ってろって言ったのヒデおばじゃん。待ってればわたしは絶対に来るから、って言ったんじゃない。絶対に、とまでは言わなかったかな。

ぺろん、ぺろん、とドロップスをなめる。カチン、カチン、と歯に当たる。甘くて固くて、少しずつ溶けて、広がって、染みて。

「いつでも来ればいいから、ここに」

ヒデおばは赤い缶をひきだしにしまって、「でも、もうドロップスはあげないよ。あんた虫歯があるのに歯医者行ってないでしょ」と、また怒おこった声で言った。「そういうの、ぜんぶわかるんだからね」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

「細川先生待ってるから、行くんだったら早く行きなさい」

ぺろん、ぺろん、カチン、カチン。

ふふつと笑った。甘いものが口の中にあると、どうして頬ほがふわっとゆるむんだろう。

⑦奥歯で噛かんだ。かけらにして、ごくんと呑み込んだ。

ゆるすかゆるさないかは、まだ決めていない。ゆるしても、忘れない。たぶん一生。

でも、口の中に残った甘いブドウの香りが、行こうか、と言ってくれた。

わたしはランドセルを背負い直して、ぺこりと頭を下げた。

ヒデおばは、『保健室だより』の古いのを読み返しながら「ドロップスのこと、ナイショだからね」と言って、じろつとわたしをにらんで、初めて笑った。

(重松清「ドロップスは神さまの涙」)

*ヒデおば……保健室のヒデコ先生のこと。

— JA1A_5 —

問一

A「そっけなく」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A「そっけなく」

ア 冷たく簡単に イ 強く早口で ウ 明るく元気に

エ はっきり確実に オ やさしくゆつくりと

問二

①「ハツカでいいの? 『はずれ』だよ」とありますが、ハツカが「はずれ」であることがわかるたっちゃんの表情を、本文中から十～十五字でぬき出しなさい。

問三

②「わたしたちがベッドに入ると、ヒデおばはふだんは使わないカーテンを端から端までびったりと閉めた」とありますが、ヒデコ先生がそうしたのはなぜですか。理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア たっちゃんの両親を、わたしに会わせないようにするため。

イ たっちゃんの両親との話を、わたしとたっちゃんに聞かせないため。

ウ たっちゃんに外を見せず、おとなしくベッドで寝かせるため。

エ たっちゃんとわたしが、ひみつきちで楽しく過ごせるようにするため。

オ たっちゃんが手術前で、安静にしていなければならないため。

問四

③「悲し涙が溶けて、広がって、染みていく」とありますが、わたしがこのような気持ちになった理由を二つ、それぞれ十～十五字で答えなさい。

問五

④「二人で手を取り合ってうれし涙を流すんだろうな」とありますが、たっちゃんの両親がうれし涙を流すのは、なぜですか。その理由を十五～二十字で答えなさい。

問六

⑤「不思議な奇跡」とはどのようなことですか。「くこと。」に続くように、本文中から二十五～三十字でぬき出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

— JA1A_6 —

⑥「わたしと目が合いそうになると、そっぽを向いて、『ああ、もう面倒だった面倒だった』と大げさなため息をつく」とありますが、この時のヒデコ先生の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 残り物のオレンジとハッカのドロップスを、わたしとたっちゃんに食べさせたことを申し訳なく思い、くやんでいる。

イ わたしの方を見ると、ドロップスゲームのインチキを責められるような気がして、どうしても目を合わせる気になれないでいる。

ウ たっちゃんの手術の成功を願うあまりに、ドロップスゲームの中身を入れかえてインチキをしたことを心の底からくやんでいる。

エ たっちゃんにぶどうのドロップスを当てさせるために、苦勞して中身を入れかえたことがわたしにばれて、はずかしがっている。

オ オレンジとハッカのドロップスを、たっちゃんとわたしだけにあげたことをほかの生徒に言われないかと思い、心配している。

⑦「奥歯で噛んだ。かけらにして、ごくん、と呑み込んだ」とありますが、この時のわたしの気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ヒデコ先生とドロップスの甘みにはげまされて、細川先生に会いに行こうと決心をしている。

イ たっちゃんのためだけに、ヒデコ先生がドロップスゲームをしたことに焼きもちをやいている。

ウ ヒデコ先生が自分にはきびしいようすを見て、もう少し甘えさせてほしいと心の中で願っている。

エ 虫歯があるのをヒデコ先生に知られているため、口の中でドロップスを味わってられないと思った。

オ ドロップスのことを、ほかの生徒にナイショにできないので、一気に飲んでしまおうと思った。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

算数や数学は、頭で考える学科といわれている。けれども、実際は記憶力^{きおくりき}でかなりカバーできる。前に解いたときの経験と記憶があれば、それを援用^{えんよう}することで、わりと簡単に問題は解ける。補助線を引いたりする幾何^{きか}の解法では頭が必要になるが、最近の学校は、幾何にあまり力を入れなくなっている。

こどもにとって重要な科目は、むしろ理科である。理科をおろそかにしてはいけないのに、先生に理科の素養が足りないため、小学四、五年生のころには、みんなが理科嫌い^{きり}になっている。

いまの小学校では、理科の実験をすることになっているはずなのに、実験嫌いな教師が多い。歌みたいなのはよくつくったりするのに、具体的なモノに触れることは、なおざりにされている。

だから、いまの学生は、自分でものを考えるということがどういうことなのか、よく理解できていない。口ではよく「考える」ということばを使っているが、「……と思う」とか「……だろう」と言うときに、「考える」と言っているにすぎない。

社会に出て、学歴で昇進^{しやうしん}するコースに乗ってしまったえば、考える必要がないから、ますます思考から遠ざかっていく。

知識では、答えはひとつしかない。だが、自分で考えることには、好きなだけ答えを出すことができる。だからあまり勉強しないほうが、おもしろいものができたりする。

学校の成績がいいものは、グライダーのように、教科書や知識に引^ひつ張^はられて飛んでいるだけである。世界に羽ばたくためには、飛行機のように、自前のエンジンで飛ばなければなら^らない。しかし、日本の学校は飛行機を製造しないで、もっぱらグライダー操縦者の養成所になってしまっている。

知識があれば、借用もできるし、利用もできる。考える必要がないから、いたってラクである。いま、日本の大学で「考える」ことを真剣^{しんけん}に教えているところは、きわめてすくない。教えようとしても、「考える」こと自体がわからないというのだから、話にならない。

思考とは、これはなにか、なぜそうなのか、という疑問をもって、それを自分の力で解こうとすることをいう。たとえば、二つのものがあって、どちらがすぐれているかを比較^{ひかく}、判断するの^③が「考える」ことである。どちらかに決めたら、なぜそれがすぐれているかを論理的に説明できなければならない。

それに対して、「思う」^④とは自発的ではなく、あくまで受け身である。外からきた刺激^{しげき}に対して心理的に反応することであって、何かすでに存在しているものを受けて「思う」。「感じる」も同じことである。

⑤ 選挙のとき、複数の候補者の中から一人を選ぶのも、思考である。選ぶという行為^{こうい}はまさに思考によるものだ。「あの人を選んだら、自分のトクになるから」と利害で選ぶことも、生活体験がベースになった実際の思考だ。

ただし、自分で考えたことだから、自分にとってはトクであっても、ほかの人にとっては損になるかもしれない。それが、自分で考えるということになる。

「あの人はいい」とか「この人はだめ」とか、人から聞いた知識で選ぶのでは、考える余地はない。思考力がないと人気投票のようになって、自分たちの生活から遊離^{ゆうり}した人が当選し、なんのための選挙かわからなくなってしまふ。

本来は、人間としてどちらがすぐれているかで選ぶには、そのような判断力が必要で、それがないとほんとうの民主主義は育たない。

⑥ 教養のある人は、いつも答えはひとつしかないと思っている。知識というのは、はじめからわかっていることだから、答えはひとつしかない。あるいは、それを知っているか知らないかのどちらかしかない。知っていれば、それで終わりである。

自分で考えるときには、はじめは答えがない。かならずしもひとつの答えに到達^{とちたつ}するとはかぎらない。途中で失敗^{とちゆう}することもある。何回も考えているうちに、何気なく^B答えにたどりつくこともある。迷いつつ考えて、わからなくなり、また考えて、最後に偶然^{ぐぜん}に出た答えが、発見や発明につながったりすることも珍^{めづ}しくはない。

「犬も歩けば棒に当たる」にしても、このごろは第三の意味があるという。歩いていると、当たるつもりがなくても、偶然、棒に当たってしまうこともある。つまり、一寸先のことはわからない。人生どこでなにかあるかわからない、と考えるのである。さらに、第四、第五の解釈^{かいしやく}が出てくるかもしれない。

⑦ こういう答えを考え出すのは、知識ではない。思考は自由である。自分で考えた結果であるなら、三通りや四通りの考え方や答えがあっても悪いことではない。

（外山滋比古『「考える頭」のつくり方』）

— JA1A_9 —

- * 学科……学校で勉強する科目。
- * カバー……足りないところを補うこと。
- * 援用……他者や本などの意見を参考にすること。
- * 幾何……図形や空間についての問題。
- * 論理……考え方の正しい筋道。
- * 遊離……ほかのものとかけ離^{はな}れていること。
- * 民主主義……国を治める権利が国民にあるという考え方。

問一

「A「なおざりに」B「何気なく」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A「なおざりに」

ア 器用に イ いい加減に ウ 大切に

エ とつぜんに オ しんけんに

B「何気なく」

ア みつともなく イ おもしろみがなく ウ 思いやりがなく

エ 意図がなく オ どことなく

問二

①「みんなが理科嫌いになっている」とありますが、その結果、起きている問題として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 理科の授業で実験が行われなくなり、理科の授業で歌み^{うた}たいなものを作ってしまうという問題。

イ 学校では理科の授業が一番大切なのに、幾何のような算数の授業ばかりが大切にされているという問題。

ウ 幾何の問題を頭を使わずに解こうとする学生が多いため、学校で幾何をやらなくなったという問題。

エ 理科の素養がなく、実験嫌いな先生が多いため、理科がおろそかにされてしまふという問題。

オ 自分でものを考えるということについて理解できていない学生が多くなっているという問題。

— JA1A_10 —

問三

②「飛行機のように、自前のエンジンで飛ばなければならない」とありますが、具体的にはどのようにすることですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア これはなにか、なぜそうなのか、という疑問に対して、それを自分の力で解こうとすること。

イ 知識を借用したり利用したりすることで、考える必要なく答えにたどりつこうとすること。

ウ 知識を借用したり利用したりすることで、一つしかない答えに何とかたどりつこうとすること。

エ 好きなだけ答えを出すことができるように、あえてあまり勉強をしないようにすること。

オ 考えなくても昇進するコースに乗れるように、理科や幾何の勉強をおろそかにしないようにすること。

問四

③「考える」④「思う」とはどういうことですか。本文の内容にそって、それぞれ二十～二十五字で説明しなさい。

問五

⑤「選挙のとき、複数の候補者の中から一人選ぶのも、思考である」とありますが、なぜそう言えるのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分がトクをするときもあれば損をするときもあるので、選挙でだれを選ぶのかは意味のないことだから。

イ だれを選ぶか迷ってしまっても、教養がある人をたよれば自分で考えなくても判断することができるから。

ウ 利害で選んだり人間としてすぐれている方を選んだりすることは、そのような判断力を必要とするものだから。

エ 自分にとってトクなのかということだけが大事なので、ほかの人のことを考える必要はないから。

オ 自分たちの生活から遊離した人が当選したとしても、自分たちに害がなければ問題は起きないから。

問六

⑥「教養のある人は、いつも答えはひとつしかないと思っている」とありますが、教養のある人が、答えが一つしかないと思っている理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 教養があれば発見も発明も生まれることはないから。

イ 知識というのは学校で勉強をして初めて身につくものだから。

ウ 何回も同じ問題について考えることには何の意味もないから。

エ 答えがいくつもあると思うと途中で失敗することがあるから。

オ 知識はそれを知っているか知らないかのどちらかしかないから。

問七

⑦「自分で考えた結果であるなら、三通りや四通りの考え方や答えがあっても悪いことではない」とありますが、筆者はなぜそう言うのですか。その理由を二十～三十字で説明しなさい。

問八

本文で筆者が主張したいこととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 様々な解釈を出していくためには知識を身につけていくしかないので、学校の勉強をおろそかにしてはならない。

イ 自分で考えていると答えがなかなか出ず、途中で失敗する可能性もあるので、慎重に考えていかなければならない。

ウ 人生は一寸先のことはわからないので、学校で勉強して知識を身につけるとには何の意味もない。

エ 人生どこで何があるかわからないので、自分で考え、様々な考え方や答えを出せるようになることが重要である。

オ 自分で考える力を育てていけば、いくつも答えが出てしまうような場合であっても判断に迷うことはない。

【三】

次の①～⑩の漢字はひらがなに、カタカナは漢字になおしなさい。

- ① 紅花を育てる。
- ② 魚の類いは、好物だ。
- ③ 人数を増やす。
- ④ 変化を察知する。
- ⑤ 女王が君臨する。
- ⑥ えさにムラがる魚。
- ⑦ ハタイロが良くない。
- ⑧ キョウエイの選手になる。
- ⑨ 昔、チヨジュツした本。
- ⑩ イルミネーションをデントウする。

問 三	問 二	問 一	【二】
		A	
		B	

[illegible]

⑨	⑦	⑤	③	①
した		する	やす	
⑩	⑧	⑥	④	②
する		がる	する	い

[illegible]

受験番号		氏名		得点	
------	--	----	--	----	--